

# ジェンティーレにおける国家と教育

中川政樹\*

Masaki NAKAGAWA\*  
State and education in Gentile

## 要 旨

ベネデット・クローチェとともに、イタリア理想主義思想を代表する哲学者であったジョヴァンニ・ジェンティーレは、クローチェとの共同作業によって当時のイタリア思想界に大きな影響を及ぼした。彼は、第一次大戦への参戦問題において、国家に関する理論を提示して参戦論に意味付けを与え、また、「ジェンティーレ改革」として後世に名を残すファシズム初期の教育改革を主導したことによって、教育分野においても無視し得ない重要な地位を占めている。本稿は、ジェンティーレの政治思想を、20世紀前半のイタリアにおける国家と教育の問題に焦点を当てて、論ずるものである。彼の国家論はヘーゲル流の「倫理国家」と解されているが、「倫理的実在」とされたその国家観はファシズム台頭期の政治・社会状況の中で、どのような意味をもったのか、また、彼の教育論、とりわけ、国家と国民教育に関する彼の主張は、当時の政治潮流との関係で、どのような役割を担うことになったのか。これらの問題が本稿のテーマであり、その解明の試みである。

【キーワード：ジェンティーレ、国家、教育、ファシズム、クローチェ】

## はじめに

イタリア理想主義の哲学者、ジョヴァンニ・ジェンティーレ（Giovanni Gentile, 1875-1943）は、1922年10月に成立したムッソリーニ（Mussolini）を首班とするファシスト政権の公教育大臣に就任した。翌23年5月、彼はファシスト党に入党し、ファシズム文化界の指導者として活動することになった。その主なものを列記すると、24年、憲法改正のための15人委員会を主宰、25年、ファシスト文化協会を設立、ファシスト知識人宣言を起草、イタリア百科事典の編纂に着手、28年、ピサ高等師範学校校長に就任、32年、アカデミア・デイ・リンチエイ会員、43年、イタリア・アカデミーの議長に就任など、ファシズム体制のもとで輝かしい経歴を残したのであった。

このようにジェンティーレは、1920年代初頭から1943年4月に反ファシズム・パルチザンの青年たちによってフィレンツェ郊外で暗殺されるまで、一貫してファシズムと一体化したファシスト知識人の代表的な思想家として行動したのである。しかし、彼とファシズムの間には、当然のことながら多くの対立や相違があった。その軌跡はまさにジェンティーレの理想主義とファシズムの葛藤のそれであったように思われる。その過程ではファシズムに対する見解・評価の違いから、反ファシズムの立場を鮮明にすることになったクローチェ（Benedetto Croce）やロンバルド・ラディーチェ（Giuseppe Lombardo-Radice）などかつての友人や弟子との対立・

反目を経験することにもなった。それらは彼の思想・理論の発展を巡る一大ドラマとなっている。とりわけ、イタリア理想主義哲学の形成に協力し合い、当時支配的であった諸思想潮流に対して共同して戦った盟友、クローチェとの最終的な対立に関する詳細な検討は、彼の理論や行動のより正確な理解に欠かせないものと思われる。

ファシスト政権樹立当時、彼らの思想的・理論的な相違・対立はすでに公然たるものになっていた。しかし、そのような対立がありながらも、他方で両者は頻繁に手紙を交し合い、親密な私的・家庭的な交流が続けられていた<sup>1)</sup>。このような状況のもとで両者の最後の共同事業は、教育改革、すなわち、ジェンティーレ改革として後世に彼の名を残すものとなったファシズム初期のイタリア教育改革であったと考えられる。ジェンティーレ改革は両者の緊密な協力とジェンティーレの教育理論に賛同する人たちの助力によって日の目をみたのであった。

ジェンティーレは若き日の教職経験から教育の問題に深い関心を寄せ、教育学研究に力を注いだ。彼にとって哲学と教育は一体のものであり、それはさらに国民・国家の問題に繋がっていた。ジェンティーレ改革の理論的支柱となった彼の教育と国民・国家の観念は、倫理国家論として展開され、ファシズムの理論にも部分的に共有されうるものであった。小論はジェンティーレ改革にいたる過程の彼の行動に焦点を当て、哲学と教育、教育と国民・国家に関する彼の思想を検討しようとするものである<sup>2)</sup>。このためには、彼の行為主義哲学およびジェン

\* 高根大学教育学部共生社会教育講座

ティーレ改革全体の詳細な吟味を必要とするであろうが、小論の目的からそれらは別稿に譲り検討の対象を上記の範囲に限定することとする。

## 1. 国家の倫理性

1898年ジェンティーレは、マルケ州カンポバッソ（現モリーゼ州カンポバッソ）にある王立マリオ・パガーノ高等学校（Regio Liceo Mario Pagano）に哲学教師の職を得て赴任した。彼はヘーゲル哲学の研究者スパヴェンタの著作を収集しながら、歴史と実践の哲学に関する研究に没頭した。しかし、カンポバッソで高等学校の教育に携わった経験は、彼の関心を哲学とともに教育の問題に向けさせ、のちに彼の名を残す教育改革へ導いたのであった。彼がカンポバッソで直面したのは、哲学教育に関する二つの問題であった。その一つは、教育方法の画一性である。彼の在職した高等学校では、当時支配的であった教育方法を画一的におこなうことが提唱され、哲学教育において真理を解釈することもまたそのような方法でおこなわれていた。しかし、仮に真理は一つであるとしても、すべての哲学者が自ら真理に到達したと確信しているので、真理についての多くの解釈が存在することになる。それゆえ、ジェンティーレはこのような高校教育の改革の試みに反対し、哲学教育の方法を画一的におこなうことを容認する傾向を批判したのであった<sup>3)</sup>。

そしてもう一つの問題は、高等学校で哲学を教育することの是非であった。哲学教育に疑問を呈する人々からは、哲学に代えて外国語を教育するという提案がなされていた。しかし、「新しい国家がイタリアに生まれた。しかし、哲学的国民精神がそれに伴っていない。それは、国家の魂のない国家が存在するということである」とする恩師ヤーヤ（Jaja）の言葉は<sup>4)</sup>、教育の役割は国民の自己意識を形成することであり、国家や国民にその「形式」を提供して、リソルジメントの事業を完成に導くことであるという信念を抱かせた。彼にとって哲学はすぐれて精神の問題に関わるものであり、哲学の分野だけでなく教育学の分野で国民意識・精神の問題を提起することを決意したのであった。こうして、人間の自己意識としての哲学の概念に、ジェンティーレは国民的意識獲得の歴史としての哲学の概念を付け加えたのである。

1906年から1909年の間、彼は相次いで教育学に関する著作を世に問うた。教育論争に関った理論家としての彼の最初の著作は、1905年11月19日の中学校教員連盟のナポリ大会で発表された「中等学校改革」（La riforma della scuola media.）をテーマとしたものである。中等学校は大学教育の前段階と位置づけられるのではなく、それ自体で存在意義を持たねばならない。中等学校の教育は「精神および人間の意識形成の、その本質の、あるべきこととあることを知ることの出来る人間の教育」でなければならず、まさに「この関心を呼び起こすこと」が重要である<sup>5)</sup>。「……私は高等学校で哲学者を養成することは出来ない。しかし、精神の無気力を揺り動か

し、外部から生徒の内面に関する観察を引き出さねばならない。一連の考察でもって哲学的問題があることを示さねばならない。<sup>6)</sup>」それゆえ、中等学校の教育はすぐれて人文主義的すなわち文芸的・哲学的でなければならない。

しかし、当時の中等学校は、興味や関心を刺激するという点ではまったく機能していなかった。生徒数が過剰であるために、その多くは真摯に学ぶ雰囲気を持っていなかった<sup>7)</sup>。このような放任主義的状况にどのように立ち向かうか。ジェンティーレは二つの方法を提示した。その第一は、大学への進学に繋がらない多くの技術学校や商業学校を設立し、中等学校の削減・整理をおこなうことであった<sup>8)</sup>。そして第二は、教育の統一である。精神哲学によって教育学と哲学の一体化をおこない、教育の統一をはかることが計画された。ここから学校改革の準備の長い議論が始まったのであった。

しかし、当時彼が進めていたヘーゲル研究のためには田舎町のカンポバッソは不都合であり、またよりよい経済的条件を求めて都会の学校への転任を考えなければならなかった。それは、行政当局・政治家への働きかけやコネなどの恩顧に頼らねば不可能であった。彼はナポリのジェノヴェージ高等学校（liceo Genovesi）の哲学教員の募集に応募し、結局失敗に終わったが、1900年、ナポリのヴィットリオ・エマヌエル高等学校（liceo Vittorio Emanuele）の補修学級の講座に転任することに成功した。

クロウチェの住むナポリに移ることで、彼は1903年に創刊された『ラ・クリティカ』《La Critica》誌や1905年に刊行が開始された『現代哲学古典全集』《Classici della filosofia moderna》シリーズなどのクロウチェの知的事業に関与しながら、イタリア文化の改革運動に参加することになった。他方、国家や政治を批判しながらも、就職のためにその悪弊に頼るという矛盾やイタリア南部の恩顧的民主主義への依存を余儀なくさせられた経験は、彼を倫理国家の理念に接近させ、文化の改革には国家の改革が必要であるという確信をもたらすことになった。

こうして、ジェンティーレは、高等学校教育の経験と哲学教育に関するカンポバッソでの経験から、この時期に哲学と教育に関する考察を深めていった。まず、精神と哲学に関して、「具体的精神は主観でも客観でもなく、客観化される主観、主観性によって主観化される客観である。このため、精神は生成である。それは、総合すなわち常に緊密に結合された二つの対立物の統一である。この統一としての精神は、芸術（抽象的主観の現実）や宗教（抽象的客観の現実）の具体性であり、すなわち哲学である。<sup>9)</sup>」

そして「すべての人間は、世界、現実、法などの対象を認識しながら哲学する人間である。……哲学は彼自身の精神であり、生きるために発展し自己構成をしなければならぬ彼そのものである。したがって、彼の哲学は常に実現途上にあり、決して完成することのない彼

の理念である。<sup>10)</sup>」さらに、この哲学と教育については、「精神の生命としての具体的かつ真に現実的な統一を目的とする教育は、常に道徳的、常に精神的な教育以外のものではなく、それゆえ、常に哲学的な教育以外のものではありえないのである。<sup>11)</sup>」この言葉はジェンティーレの教育思想を端的に示しており、彼にとって教育学は本質的に哲学と一体であり、哲学的教育学であった<sup>12)</sup>。

1919年にトリエステで開催された小学校教員の講習会での講演を内容とする『教育改革論』(La riforma dell'educazione)は、彼の教育思想を示し、教育改革の指針を表明している。そこで論じられたのは、「知の国民性」というテーマであった<sup>13)</sup>。第一次大戦の結果、イタリアに帰属することになったトリエステというイタリア人に国家や国民性を意識させる町で、それが表明されたことは重要である。この講習会に集まった小学校教員たちに、ジェンティーレは「イタリア的知識の形成」を提唱し、「今日からは、我々の心の外皮を破り、我々のすべての道義心において結集しようではないか。国民文化の基礎の上に、学校を、国民の学校を、イタリアの学校をともに作ろうではないか<sup>14)</sup>」と呼びかけた。

「科学が文化、意識形成の道具、要するに人間教育や市民教育の手段であるかぎり、国民的なものでなければならぬ。<sup>15)</sup>」知識や科学と国民あるいは国家の関係は、「近年の戦争によって生み出された国民感情の高揚の中で最も熱中した議論の対象となった」大きな問題であったが、ジェンティーレは、知識や科学が個別の国家や国民を超えた普遍的なものであるという議論を斥けて、国民的知識や国民的科学的可能性に言及し、知識や科学の国民性を主張したのである<sup>16)</sup>。

国民性を形成する要素は、「自然的価値と道徳的あるいは精神的価値を持っている。<sup>17)</sup>」地域、言語、共通の政治生活、風俗・習慣、宗教、種族等の諸要素が、自然的価値である。そして、「国民という概念そのものに堅実性と実在性とを付与するものは、……精神力の活動であり、この活動によって我々が属すると感じる集団的な人格意識内の一要素または諸要素と我々が堅固に結ばれるのである。すなわち、国民性はさまざまに変化する内容ではなく、国民的特性が構成されるときに人間の意識がとる形式に存在するのである。……要するに、国民は自己を主張し、自己実現をする人民の共通意思である。<sup>18)</sup>」これが道徳的あるいは精神的価値なのである。

このような国民国家あるいは民族国家の形成要因としての客観的条件(自然的価値)と主観的条件(道徳的あるいは精神的価値)は、現在の民族国家論においても一般に広く受け入れられている概念であるが、ここから、国民は「国家の形態の中でそれ自身の人格あるいは共通の民衆の人格を実現するように活動しなければならない。国家の外には集団的意思はないのである<sup>19)</sup>」という論理が導き出される。

さらに、「国家の普遍的意思は我々の具体的かつ現実的な倫理的な人格と一体のものである。我がイタリア、我が祖国は、我々の魂の中に生きているもの、すなわち我々

が実現する豊かな総体そして崇高な道徳的理念<sup>20)</sup>」であり、祖国の中に生きる人格である。それゆえ、「我々はイタリア人として」はじめて具体的人格たりうる。「このように国民が理解されると、その国民性の刻印を持たない人間の生活はありえないだけでなく、国民的科学的でない人間の科学もまた存在しない。……科学はもはや純粋な観想ではなく人間がそれ自身で獲得し、それを手段として自己の人間性を実現する意識である。……具体的な人格を語る者は国民性を語るものであるから、学校も科学も国民的知識でない知識を知らないのである。<sup>21)</sup>」こうして、知識や科学はそれ自体のなかに国民性を包含し、教育もまたすぐれて国民性や国家主義の色彩を帯びることになる。ここに示されているのは国家主義的教育観であり、彼の教育思想のバックボーンとなっているのである。

このような観念はファシズム体制の教育理念に繋がっている。1923年11月、ジェンティーレは、ファシスト政府の教育改革の精神を公教育高等評議会(Consiglio superiore della pubblica istruzione)における演説で示す中で、国家と国民の関係について次のように論じた。

「国家とは……外的・法的制約または統制による制度ではない。国家は倫理的実在(sostanza etica)であり、その歴史的発展を通して社会の中に自己の人格を形成し、自己を肯定し、自己を主張する個人の意識そのものである。……国民とは自己の歴史的過去において自己を意識する意志であり、……我々の意識の中に国家を投影し、追求すべき目的と遂行すべき使命とを提起しながら、我々の国民性を描写し、表象するものである。このような国家のためには我々は進んで自己を犠牲にすべきである。なぜなら、確固たる価値を与えられるに値する我々の真の生命とはこのような使命の遂行の中のみ萌芽するものであるからである。<sup>22)</sup>」

このような国家は「道徳的生活を実現すべき制度」、すなわち倫理国家に他ならない。この道徳的生活の実現こそ、ジェンティーレにおける教育目的である。それゆえ「国家は教育をおこなうのであり、またおこなわなければならないのである。……国家はこの道徳的生活を昇進させる学校を、しかもこの中において、国家がその機能を果たしうべき道徳的生活を昇進させる学校を維持し保護しなければならないのである。国家は学校の中において自己を実現するのである。<sup>23)</sup>」

こうして、国家はクローチェの唯名論的国家のような「単なる言葉ではない。……国家は、現実であり、現実の倫理的活動態である。それは自己について論ずるのではなく、自己を確立し、たえず自己を実現していくものである。もし実現されるなら、それは実現されるべきなにかとして、つまり、神的な、絶対的な、一つの法を体現するなにかとして実現されるしかないのである。<sup>24)</sup>」

しかし、このような国家に自由は存在するであろうか。彼は、純粋活動としての精神は絶対的自由であるというその哲学から「自由の客観的存在」を「国家の中に」求

めて、以下のように自由と国家権力との対立を否定する。

「自由には二種類のものがある。一つは個人主義の主張する絶対的自由で、それは論理的には無政府状態に導く。他は具体的自由であって、それは国家そのものである。前者の概念では個人が国家に対立している。後者では個人は国家の中であって自己の価値を認めない。個人は自己の意思を共同意思と一致させる。すなわち個人は自己の中に普遍的意思を顕現させるために」、あらゆる利己主義を放棄するのである<sup>25)</sup>。

第一の自由の概念は「人は生まれながらにして自由である」というフランス革命の原理に基づくもので、生物的または心理的自由である。この概念にしたがえば、ジェンティーレの言う道徳的生活は存在しない。他方、第二の自由の理論によれば、「個人は道徳的にも知識的にも高位にある国家の機能を絶対的に信仰してその決定にしたがい、……規則的に組織された政府に自律的に服従すべきものとなるのである<sup>26)</sup>。」このような国家において、自由は「国家の中」で「国家への」自由と観念されるのである。

## 2. 第一次大戦と国家

1913年のプレッツォリーニ (Giuseppe Prezzolini) の主宰する雑誌『ラ・ヴォーチェ』《La Voce》誌を舞台に、クローチェの公開書簡「行為的観念論について」(Intorno all'idealismo attuale.) に端を発する論争は、クローチェとジェンティーレの理論的対立を表面化させ、両者の関係の転換を印す大事件であった。しかし、彼らは決定的な破局を可能な限り避ける方策を模索し、両者の書簡集が示すように、これまでと変わらない親密な交流を継続したのであった。1914年に初めて交した書簡には、学術的な事柄以外に、妻アンジェリーナの死から5年を経過したクローチェのアデーレ・ロッシとの再婚と、ジェンティーレの恩師ヤーヤの死去についての私的な情報の交換がなされていた。しかし、この年の夏になると、7月に欧州に勃発した戦争への憶測や心配が広く人々を支配するようになり、戦争に関する話題が記されるようになる。戦争についての話題の口火を切ったのは、ジェンティーレであった。彼はバレルモで経済問題が重大さを増し、戦争への心配が高まってきたことを憂慮し<sup>27)</sup>、クローチェは旅先のバッレ・ダオスタ州から「戦争によって落ち着かない」<sup>28)</sup>と返信した。

その後、ジェンティーレはヤーヤの後任としてピサ高等師範学校に招聘されることになった。クローチェは、ジェンティーレへのお祝いの手紙で、「戦争について何も知らされていない。おそらく首相も新聞も印刷されていること以上は知らない。私は幾人かの人々や軍人を見た。8月10日頃警報があったようだ。装備は強化されるだろうし、ついで、すべてが足並みをそろえるだろう」と書いて、一般人と同様に戦争についての確かな情報を得るにいたっていない様子を述べている<sup>29)</sup>。しかし、戦争は両者の思想の現実的妥当性を問う試験紙となること

は明白であった。したがって、その後、両者の手紙に戦争に関する記述は頻繁になり、彼らはまもなくその見解を公にすることになった。

イタリアの参戦に消極的であったクローチェは、参戦論者であるプレッツォリーニへの手紙の中で、次のような見解を示した。「いまや私は確信した。技術的な整備の悪い軍隊で、偽りの国民的熱狂のもとに育った市民的対立の騒乱でもって、あまり軍事的訓練を受けていない人々を戦争に投げ入れること、すべてこのことは愚かな事であり、犯罪であると。国民の大多数が戦争について知識を持っていないと君は論ずる。もし、ドイツについてそれが将校たちの戦争だとするなら、我が国のそれは、ジャーナリストたちの戦争と言わなければならない。……私は、いかなる場合にも絶対に参戦してはならないとは言わない。しかし、それは必要性が……それを命じ、不可避の感情が我々すべての魂を奪う時のみ、行われなければならないだろう。<sup>30)</sup>」

また、クローチェは、イタリア人を見下していると非難したプレッツォリーニに反論して、次のように述べた。「私は、君が言うように私が属しており、私自身もそうである民衆をいやなものを見ていない。だが、その徳や欠陥、力や弱さを考える。私はいわゆる絶対的中立を支持していない。しかし、戦争は推論でもって、その先導でなされるのではなく、戦う人々によって普遍的に感じられなければならないと言いたい。……もし、私の反対意見にもかかわらず、戦争が宣言されたなら、私はもっとも決然とした戦士になるだろう。<sup>31)</sup>」

他方、ジェンティーレはバレルモの友人の依頼で、10月11日哲学図書館において、そして、ジョヴァンニ・アメンドラ (Giovanni Amendola) に招かれて、11月22日フィレンツェの図書館でそれぞれ戦争に関する講演を行った。その論旨はのちに「戦争の哲学」(La filosofia della Guerra.) と題して、1919年に公刊された『戦争と信条』《Guerra e fede.》に収められているが、彼は戦争を「歴史的具体的現象」、「歴史における精神のあり方」、「行動しつつある哲学」として、いわば形而上学的戦争論を展開したのであった。

ジェンティーレにとって、戦争は地政学的、経済学的あるいは法律的言葉で説明しうるものではなく、「神のドラマ、地表に組織されたすべての勢力の試練 (大胆な企て)、全体がかかわる絶対的行為」であり<sup>32)</sup>、ヘーゲル流に言えば、哲学者が外的でも中立的でもありえない普遍的現実、すなわち、「普遍的現実の発展のモーメント、世界の生の具体的な一形式」であった。ジェンティーレは、個々ばらばらな国民が一体となって国家に結集する一つの機会として戦争を捉え、それを国民意識高揚ための「試験」と考えたのであった<sup>33)</sup>。

このような戦争観はクローチェのそれとは明らかに異なっていたが、彼は戦争を「イタリア人の絶対的行為、彼らの大いなる心配事、そして、彼らの唯一の関心事」であり、「我々の意思、我々の個性、我々国民を代表する人によってもたらされるまで、イタリア人は静かに待

たなければならない」と述べるにとどめ<sup>34)</sup>、イタリアの参戦にまで踏み込まなかった。そして、国民の統一と鍛錬を主張しながらも、「各人の第一の義務は大なる出来事を前にして謙虚に沈黙し、……世界のこの特別な日を迎えて宗教的な荘厳さの中に没入している自分を感じとることである<sup>35)</sup>」として、参戦か否かについてはなお沈黙を守っていたが、この待機的態度は彼には適切ではないように思われた。

これに対して、クローチェの見解は、12月6日、『イタリア・ノストラ』《Italia Nostra》誌に掲載された。「戦争は愛や憤怒のようなものだ。すなわち、多くの恨みや扇動（教唆）が生み出すのではなく、当然、どうしてか分らず、自ら生み出し……、魂が身を襲い、その力を百倍にし、方向付け、そして、自らによって正当化するなものか」であった。クローチェによれば、これまで神秘主義や唯美主義と戦ってきたが、戦争を煽る人たちは新しい哲学や理論、詩、絵画を作ることなく、「……無謀な安易さで、彼らは政治や戦争を即興化すること」に貢献した。彼は参戦論を唱える人たちが「この無謀な安易さで、……イタリアの将来を玩ぶ」ことを批判し<sup>36)</sup>、参戦論争への関与を控えることにしたのであった。

1915年に入ると、ジェンティーレは「国民」としての精神的統一を訴え、戦争を通じてイタリアが「世界に価値ある存在」になることの必要性を論じ始めた<sup>37)</sup>。彼は、イタリアが参戦か中立かを決めかねている不確定で不決定の状態の継続を恐れた。国には自己の墮落が迫っており、この危機を脱して道徳的に蘇生するためには、外交の机の上ではなく武器による戦争での偉大な勝利が必要であった。ジェンティーレもクローチェのように、ヨーロッパ的広がりをもった戦争にイタリアが十分な準備をおこなっているかを危惧しないわけではなかったが、事実のみがその質問に答えるとしてその疑問を乗り越えた。したがって、戦争は彼の目には国家的試験、あるいは、イタリアが純粹に非外交的存在になりうるかを歴史的に検証する重要かつ決定的な方法と映ったのであった。

こうして、ジェンティーレは、戦争の精神的概念を論じ、戦争に積極的価値を付与して奨励する方向を示したのに対して、クローチェは戦争への危惧を示し、安易な参戦論に警告を發し、慎重であるべきことを要請したのであった。クローチェは、その後もイタリアの参戦を遅らせることを探求し、準備のできていない国にとっての戦争の危険性、旧同盟国であるドイツと戦争をすることによって、イタリアが負う重大な道徳的な責任についての主張に固執しながら、知識人の間に強まっていた参戦主義的雰囲気に対する少数者の闘いをおこなった。逆に、ジェンティーレは、戦争がイタリア国家と国民にとって、単に政治的のみならず、道徳的義務であることを確信するにいたっていた。したがって、戦争を前に両者の見解は、まったく対立する内容を含んでいた。しかし、彼らは「異なった言葉で同一のこと」を表現したのだと主張した。すなわち、クローチェが新聞記事でジェンティーレが戦争に関する講演を行ったことを知り、彼にその内

容を尋ねたとき、彼はその返信で、「（私の話は）その場の状況に合わせたとはいえ、本質的には、あなたが『イタリア・ノストラ』誌に書いたことと似通っている」と述べた<sup>38)</sup>。クローチェはそれを読んで「私は全く君と一致している」と返事を書いたのであった<sup>39)</sup>。

両者は、前年の論争で思想的・理論的には袂を分ったかのように思われたが、政治への発言では相違を少なくしようと努め、彼らの不一致を示す表現に注意を払ったのであった。しかし、公的にあるいは私的に自由な意見交換を続けながら、彼らは最初の見解に含まれた前提を發展させないままに終ることはできなかった。

前首相ジョリッティが、イタリアが戦争に巻き込まれることを阻止するため中立を訴えたとき、両者の反応は全く異なった。クローチェはそれを歓迎したが、逆に、ジェンティーレにはジョリッティの行動は道徳的にも政治的にも不適切であるように思えた。ジョリッティの中立へのイニシアティブが失敗に終わったのち、5月21日上院で政府に全権を付与する法案が上程されたが、クローチェは参戦論がもはや覆しえない大勢となったことを認めて賛成票を投じた。参戦か中立かの「最終的決定は、国家を代表する人物にのみ属する。」それゆえ、「決定が下されれば、すべての者がそれにしたがひ、国家的事業に協力する」べきであり、「戦争となれば、過去の議論を一切忘れる」ことが、彼にとって責任ある態度であった<sup>40)</sup>。

逆に、ジェンティーレは、イタリアが最終的に不確定な状態を脱出したことを喜んだ。そして、以前にもまして偉大な国民的試験を確信した。領土の拡張や植民地の獲得を目指した参戦論者や国家主義者とは違って、彼は、戦争それ自体が目的や動機を前提とせず、また、求めない重要な行為であると考えた。イタリアが参戦前の道徳的弛緩状態に、そして、利益や利己主義の民主主義に回帰することを避ける必要があった。彼は戦争終結後の1918年に次のように書いた。「国家はそれ自身その使命に関する意識を欠いて放棄された状態にあった。公的利益感覚は人々の魂の中で曖昧で……祖国という聖なる名称は学校の外ではうつろに響いた。戦前の我がイタリアはこのようであった<sup>41)</sup>」と。道徳の危機に警告を發し解決するには、新しい国家観念、すなわち一党派の道具ではなく集団的な利益を代表する機関としての国家という観念によるしかないであろうと考えたのであった。そして、人民が自らを国家に対置するような疑似民主主義を、「人民それ自体が国家であるような真の民主主義」と区別したのである。

彼の自由主義は、個人を国家に対置する自由主義、原子のような個々人の尊重から出発する啓蒙主義的個人主義の帰結である古典的自由主義とは全く対立するものであり、国家を「その深部に合理性と合法性を具えた、個人の意思そのもの」として捉える自由主義であった<sup>42)</sup>。「少なくともこの百年来の自由主義は、国家を自由として観念し、また自由を国家として観念するものである。この二重の等式の統一の中にこそ、自由の原理が的確に

表現されるのである。自由とは、個人の外部に存在する国家でもなければ、抽象的な個性として国家という内在的な倫理的共同体の外に認識される個人のことでない。個人は、国家の中にこそ実質的な自由を実現するのである。<sup>43)</sup>

自由主義とは、自由を「個人の自由ではなく国家の自由の観点」から捉えることを要請する教説であるというテーゼは、ヘーゲルの研究を始めて以来ジェンティーレが早くから抱いていた国家概念に発するものであった。こうして、倫理国家とその自由主義的母胎の問題は、1915年以降、彼の政治的活動の一つのテーマになった。戦争は国民の国家への忠誠心と道徳性を目覚めさせ、クローチェ流の「個人あるいは個別利益の総体」としての国家像を否定して「倫理国家的な」国家像を再構築することを彼に促したのであった。

このような主張は、ジェンティーレだけのものではなかったにせよ、イタリア文化の広い領域における彼の権威を打ち建てることとなり、また、彼の思想が参戦に哲学的正当性を与えたという事実が、若者たちにはジェンティーレこそ「出来事に意味を与え、イタリア人に知的一貫性を持って生きることを援助する哲学者」であると考えられて、一種の道徳的・知的殿堂の主としたのであった<sup>44)</sup>。戦争を巡る論争の過程でジェンティーレはこれまでの研究室の範囲から抜け出し、新聞、雑誌、政治的・社会的議論の中に入っていった。そしてまた、「イタリアは病んでいた」との認識は<sup>45)</sup>、イタリアに秩序と責任感を取り戻すための教育が必要であるとして、国民教育の問題にたえず彼を立ち帰らせることになったのである。

### 3. 教育の改革

1918年11月、戦争は終結した。翌1919年は、ジェンティーレのその後の研究と政治活動を規定する重要な年となった。戦争は、外見的にはジェンティーレとクローチェの私的な交流にほとんど変化をもたらさなかったかのように思われた。相互に交される手紙に表れた個人的・家庭的やり取り、家族ぐるみの付き合いは、両者が理論的・思想的関係と私的・家族的関係を極力分離させ、友好的な関係を保とうと努力していた様子が伺われる。しかし、そのような親密な交際とは別に、1913年の行為主義を巡る論争や参戦問題に関して顕現したクローチェとの新たな見解の相違は、その後両者の関係の亀裂をさらに拡大していくことにならざるをえなかった。

ジェンティーレは、『ラ・クリティカ』誌でのクローチェとの共同作業を続けながら、自由に自らの見解を表明することのできる雑誌を持つことの必要性を感じ始めた。1919年10月に、愛娘テレザがクローチェ宅を訪問した際の歓待に対するお礼を述べた手紙の中で、彼は新しい哲学雑誌『ジオルナーレ・クリティコ・デッラ・フィロソフィーア・イタリアーナ』《*Giornale critico della filosofia italiana*》誌を3月に刊行する準備を進めている

と伝え、計画案を送ってクローチェの判断と忠告を求めた。そして、彼に新雑誌への寄稿を依頼したのであった<sup>46)</sup>。クローチェは、『ラ・クリティカ』誌と理念的にも内容的にも対抗することになる雑誌の発刊に当惑しながらも、純粋な哲学雑誌の経営は困難であること、そして、よき協力者を確保することの重要性を指摘して、編集部での不都合を最大限除去することを勧めた<sup>47)</sup>。

のちに、クローチェのもとに届いた計画案と発刊の辞の原稿には、イタリア哲学の持つべき「国民的」性格が高唱されていた。それは、古い論争を再びかき立てるものであり、彼はジェンティーレに「国家主義的な」哲学観念を放棄するように忠告したのであった<sup>48)</sup>。これに対して、ジェンティーレは「国家主義的」と思われる点については、ラテルツァ社が印刷中のトリエステ講演原稿の中でもう少し自分の思想を展開したいと返信して<sup>49)</sup>、この議論は進展することなく、新雑誌が発行されることになった。

翌年3月にジェンティーレの新しい哲学雑誌が刊行されると、クローチェは「ついにイタリアは外国に比べて遜色のない哲学の特別誌を持った」と祝し<sup>50)</sup>、他方、ジェンティーレは、発刊号への寄稿に続きこれからも「あなたの名が頻繁に載る」こと、および、新雑誌が『ラ・クリティカ』から派生した雑誌としてあなたの願うものになるだろう」と書いて返礼したのである<sup>51)</sup>。さらに、ジェンティーレは、彼の重要な哲学理論書、『純粹行為としての精神概説』《*Teoria generale dello spirito come atto puro*》の第3版をクローチェに捧げるという心遣いをみせた<sup>52)</sup>。そして、クローチェは礼状に「私たちの間に不和の調和 (concordia discors)」が存在するが……知的友人の間にこのようなことがあるのは当然だ」と書いたが<sup>53)</sup>、それは両者のこれまでの論争の中で繰り返し語られたことであった。

20年6月、ジョリッティを首班とする新内閣の成立に際して、クローチェは公教育大臣として入閣することになった。それは、彼にとって予期せぬことであった。なぜなら、「新聞に……予想される公教育大臣として、私(クローチェ)の名前が挙げられていた。私はその声を気にしなかった。なぜなら、ジョリッティとは面識がなかったし、政府や政治活動に入りたいとは思っていなかったから……<sup>54)</sup>」である。この第五次ジョリッティ内閣は、第一次大戦後の社会対立を左右の勢力を融合することによって緩和しようとする意図から、クローチェの他、カトリックのフィリッポ・メーダ(財務大臣)、元社会主義者のイヴァーノエ・ポノーミ(国防大臣)、元サンディカリストのアルトゥーロ・ラブリオラ(労働大臣)、ファシストのカルロ・スフォルツァ(外務大臣)など、きわめて多様な人々によって構成されていた<sup>55)</sup>。

クローチェの公教育相就任は、ジェンティーレにとって大いに歓迎するものであった。1902年以来教育の問題に深い関心を抱いてきた彼は、クローチェの大臣就任とともに理想主義的教育改革を遂行するという彼の夢が実現する機会が訪れたと思ったのであった。こうして、ジ

エンティーレは、学校問題と教育行政に関する公教育相の第一の相談役になった。もとより、理想主義教育改革は、教育行政の中央集権化、教育の自由、指導的エリートを選別と義務教育の普及を主な内容とするものであったが、この改革を推進するためには、改革案を発表し、教育議論をするだけでは十分でなかった。学会・学術会議、公教育の行政・教育組織そして議会のなかで賛同者を増やし、政治の内部から改革を構築することが必要であった。ところが、彼らにはそれが欠けていた。彼らの目指す教育改革は、民主主義者、社会主義者、カトリックそして官僚制の厚い壁を崩すことができないまま両者の孤軍奮闘が続き、21年7月の内閣総辞職によって、それは失敗に終わったのである。

改革の次の機会は1年後にやってきた。22年10月30日、ファシスト政権が誕生した。10月28日、エンティーレは新政権の公教育相に就任を要請されたのである。彼らの教育改革に再び展望が開かれることになった。彼は就任の条件として、自由の保障と公・私立中等学校への国家試験の導入の2つを求めた。ムッソリーニは組閣を急いでいたためその条件をとりあえず受け入れたが、その履行が約束されたと確言できるものではなかった。エンティーレは合法性や倫理性よりも祖国の再生や強力な国家に大きな関心を示していたのでそれに拘ることはなかったし、ムッソリーニにとっても彼の政治的に都合の悪いものでもなかったのである。

エンティーレの大臣任命のニュースを聞いて、クローチェは電報と手紙を送り、「適材適所」だと祝福した<sup>56)</sup>。11月5日、エンティーレはムッソリーニによって上院議員に任命され、クローチェと同じく上院に席を得た。その後、ムッソリーニ内閣は上下両院で信任されたが、ジョリッティ、オルランド、サランドラ、パラトーレ、デ・ガスペリらの自由主義者の有力政治家たちは賛成票を投じた。のちに反ファシズムの立場を鮮明にするクローチェもこの時点では同様であった。周知のように、ファシズム政権成立後約一年を経過した23年10月、クローチェは『ジョルナーレ・ディタリア』《Giornale d'Italia》紙のインタビューに、次のように答えた。「現在の政府に対抗し代わりうる政治勢力が、どこに存在しているであろうか。私は、そのような勢力が存在しているとは思わない。むしろ、私は、あの1922年の議会の麻痺に逆戻りするという大きな危険を強調したい。こうした理由のため、思慮ある者は誰も、現状変更を望まないのである。<sup>57)</sup>

また、「個人としては、自由主義の理念を受け入れるか」否かについて、次のように述べた。「私は、個人としては、自由主義者であるし、また自由主義者でしかありえない。しかし、それは、哲学的あるいは理論的な考察によって導きだされた立場というわけではない。そうではなく、私がナポリ人であり南部ブルジョアであると感じるとまったく同じ感情で、自分を自由主義者であると感じるのである。私の知的・道徳的存在はすべて、リソルジメントの自由主義的な伝統から生じている。」その「自

由主義の心情と、ファシズムの容認および正当化との間」に「何の矛盾もない。もし自由主義者が、イタリアを無秩序から救い出す力や能力をもたないのならば、みずから反省し、その欠陥を克服することが必要である。その間、いかなる側から生じたものであれ、他の勢力の長所を認め、それを受け入れて、将来に備えなければならない。このことは、自由主義者の義務である」<sup>58)</sup>。

こうして、ファシズムの容認が彼の自由主義の心情と矛盾しないとの認識を示し、その自由主義の心情は、彼の哲学的な思想に基づくものではなく、リソルジメントの自由主義的な伝統から生じるものであると述べたのであった。

クローチェはファシズムを政治的混乱を鎮め、秩序を回復しうる唯一の勢力と認めて支持することを表明したのである。当時このような見解は、彼だけのものではなく、多くの人たちは、ファシズムが混乱を鎮めて秩序を回復した後に、自由と合法性の道に戻らうと予測したのであって、エンティーレもまた、秩序が回復された後、真の自由主義体制が設立されると考えていたのである。

23年5月31日、ファシスト党はエンティーレに名誉党員証を送り、彼もまたファシスト党への入党を決意した。クローチェはエンティーレの入党に反対であったが、基本的に同一の立場で推進していた理想主義的教育改革に彼が熱意を燃やしていることを考えてなら反応しなかった。確かに、彼らの改革案は、彼の行動にしたがった知識人たちの同意や支持を得ていたものの、いずれの政党の改革案とも結びついておらず、政界でコンセンサスを得ていなかった。したがって、エンティーレは入党によって改革へのファシストの支持を期待したのだと考えることも可能であった。

しかし、エンティーレの進める改革、すなわち、教育行政の中央集権、国家試験、公立初等学校での宗教教育などの改革への反対がその後強まっていった。23年3月4日、クローチェはその情勢を憂慮して「君が中等学校におこなおうとしている改革はすぐに失敗するだろう。ここナポリでは、反対が増え、組織化されている。皆がムッソリーニ宛に君に反対する陳情書を送るように私に言ってくる。もし、放っておけば彼らは君を無力にし、すなわち、君に最初の計画をますます縮小させるだろう」<sup>59)</sup>と手紙を書いた。これに対して、4月27日、エンティーレからクローチェに朗報がもたらされた。「私は評議会で中等学校改革の審議を終えた。それは完全に承認された。この改革の大部分は共同作業によるものだから、私は真っ先にあなたにそれを知らせたい。かくして国家試験はついに国家の法律になったのです。<sup>60)</sup>

この報を受け取って、クローチェの次のように返信した。「君の手紙は私に大いなる満足と喜びをもたらした。君は君の考えを事実の領域に移しこんだ。そして私はさまざまな方法でこの実現の準備をしたことに満足だ。悪条件のときに、現状では希望の無いことを知っていた法案を提案して……君の改革はここで最良の印象を持

った。不信を抱いていた者や反対者の多くも考えを改め、他の者たちは沈黙した。<sup>61)</sup>」

中等学校改革の後、ジェンティーレは大学改革への承認を取り付けることにも成功したが、反対者たちの反応はさらに悪化していった。この時期、ムッソリーニがこの教育改革の不人気さを憂慮し、ジェンティーレ公教育相を更迭するという噂が広まった。クロウチェはジェンティーレに「私は、ムッソリーニが状況に対処しうることを望む。もし彼が苛立ちを抑えれば、数ヶ月以内にあらゆる論争は収まり忘れ去られるであろう。すべての人はなされた事実の解説者や賞賛者となって受け入れるであろう……ファシズムが学校制度の問題を解決すれば、その反対者が獲得させようとは望まないほどの大きな功績を獲得するだろう」と書き送ったが<sup>62)</sup>、この文中に彼のファシズムに対する判断がまだ定まっていなかったことが読みとれる。

このような状況の中で、ジェンティーレは明らかに崖っぷちに立たされていた。この危機を乗り越えるために、彼はクロウチェに新聞に彼を弁護する寄稿をしてくれるように求めた。「もしあなたが論争するためではなく、この論争の性格に反対するために、『ジョルナーレ・ディタリア』紙に書いてくれるなら、確かに有益なことです。これを行うには私の人格を守る必要はありません<sup>63)</sup>。」クロウチェはジェンティーレの求めに応じて、同紙に手紙を送ったが、その中でジェンティーレを「もっとも著名な研究者……学校問題にその魂と思想の最善の部分捧げている人」と高く評価し、「ジェンティーレを排斥するなら……彼と同等に能力があり、意欲のある大臣をいつ再び持つことができるであろうか」と文を結んだ<sup>64)</sup>。このクロウチェの尽力が功を奏したか否かは定かでないが、ムッソリーニはファシストの改革への批判を封じ、大学生の反対ストライキを辞めさせるために州知事たちに電報を送って、改革を「これまでで最もファシスト的」なものとして述べたのであった。

こうして、最終的にはジェンティーレ改革が実現することになった。しかし、公教育相としての信任を得るため、クロウチェの援助を得たことは両者の関係を改善することに繋がらなかった。二人の哲学者のかつての連帯が生き返ったと見えたのはつかの間で、行為主義に関する議論は先鋭化し、25年の「ファシスト知識人宣言」を待たず断絶に向かった。1924年3月両者が交した書簡が最後のものなり、それ以後、彼らを繋いでいた書簡の交流は途絶えてしまったのである。最後の手紙となったクロウチェの書簡には、「若い頃、実証主義のむんむんする暑さに辟易したように、いま、もはや若くはないが、新理想主義学派の熱気を甘んじて受けている。私はもっと自由な空気を吸うために、鷹揚にしていきたい」と書かれており、厳しいトーンで結ばれていた<sup>65)</sup>。

## おわりに

これまで論じてきたように、ジェンティーレは国家の

普遍的意思を国民の道德倫理に転換し、倫理的人格と一体のものとした。国家は道德理念を体現する崇高な存在となった。そして、国民は祖国（パトリア）に生きる人格であり、イタリア人としてはじめて具体的人格を獲得すると主張された。このように国民が理解されると、この国民性を欠いた人間の生活はありえない。また、科学、学問、芸術すべてが、それを手段として国民性に規定された人間性を実現する意識であるから、極めて国家的色彩を帯びることになる。この国家はまさしく倫理国家であり、彼はヘーゲル的国家論者として、論理を展開したのであった。

この倫理国家はファシストの国家観と矛盾するものではなく、その国家像はファシスト国家に投影されることが可能であった。彼がファシズムの思想家と解される理由の一つとも考えられるのである。このような観念は、第一次大戦を巡る参戦論争の中でも、彼を容易に参戦論に向かわせる要因になったと思われる。彼が抱いていた上記の国家観はいまだ十全に展開されてはいなかったが、戦争は国民的試験であったと同時に、彼の国家論・政治論を自ら検証する一つの試験を提供するものであった。

また、ファシズムの台頭は彼の思想・理論の現実的有効性を立証する契機を与えた。ファシズム前の社会で得ようとして得ることのできななかった成功を、彼はファシズム政権の誕生によって部分的に得た。彼はファシズム体制の崩壊を見ることなく世を去ったが、崩壊が予見される体制末期においても、ファシズムに多くの注文を付けながら忠誠を誓ったのは、その体制が教育改革を始めとして彼の理論の正当性を証明するものであったからだと推測される。

1925年以降ファシズムに対して、かつての盟友クロウチェとは対立する陣営に属することになったが、その過程は我々にとって興味深い一つのドラマを形成している。本論はジェンティーレを中心として、彼の国家と教育に関する問題を取り扱ったが、ジェンティーレの理論形成へのクロウチェの影響には大なるものがある。しかし、ジェンティーレがその影響をいかに消化し、いかに巣立っていくか、その過程で両者の間に重大な軋轢が生じたのである。反ファシズムと親ファシズムへの亀裂はその最終的な政治的表現と考えられるのである。

## 注

- 1) その対立の先鋭化は、ジェンティーレのパレルモ大学在任中に進行したと考えられる。参照、拙稿「クロウチェとジェンティーレの知的交流に関する小話」『福祉文化』5号、福祉文化研究会、2006年。拙稿「イタリア理想主義の葛藤」『社会福祉論集』2号、島根大学法文学部社会福祉教室、2008年。
- 2) 本稿の直接引用していない部分は、主として以下の資料に負っているので付記する。Nicolini, F. Benedetto Croce, Torino, 1962. Colapietra, R.

- Benedetto Croce e la politica italiana*, vol. I e II, Bari, 1969. Turi, G. *Giovanni Gentile. Una biografia*. Torino, 2006. Romano, S. *Giovanni Gentile. La filosofia al potere*, Milano, 1984. Di Lalla, M. *Vita di Giovanni Gentile*, Firenze, 1975. Suppini, R. *Giovanni Gentile. Ideologo del fascismo*, Cremona, 1976. Calandra, Giuseppe. *Gentile e il Fascismo*, Roma-Bari, 1987. Jacobelli, Jader. *Croce Gentile, Dal sodalizio al drama*, Milano, 1989. Farotti, Fabio. *Gentile e Mussolini, La filosofia del Fascismo (e oltre) Discussione sull'Attualismo*, Lecce, 2001. Coli, D. *Giovanni Gentile*. Bologna, 2004. Capozzi, Gino. *Giovanni Gentile, Il filosofo oltre l'uomo*, Napoli, 2004.
- 3) これは、のちに1905年4月『リヴィスタ・ディタリア』《*Rivista d'Italia*》誌に、「高等学校教育における自由と哲学への新たな脅威」(Nuove minacce alla liberta e alla filosofia nell'insegnamento liceale.)と題して掲載された。 ora in *Educazione e scuola laica, Scritti pedagogici*. I. 4<sup>ed.</sup>, Milano-Roma, 1932. pp.225-232.
  - 4) Gentile-Jaja, *Carteggio*. I. Firenze, p.349.
  - 5) Gentile, G. *La scuola media*, 2<sup>ed.</sup>, Firenze, 1988, pp.95-6. これは1906年1月、『リヴィスタ・ディタリア』誌に掲載。「中等学校改革」La riforma della scuola media.は、のちに発展させられて、1923年のジェンティーレ改革の部分的素材となる幾つかのテーマを含んでいるがゆえに、重要なテキストである。
  - 6) *Ivi*, pp.100-101.
  - 7) *Ivi*, p.104.
  - 8) *Ivi*, p.107. Cf. Lalla, Manlio. *Vita di Giovanni Gentile*, Firenze, 1975, p.546.
  - 9) Gentile, G. *La riforma dell'educazione*, Firenze, 1920, ora in 2<sup>ed.</sup>, 1923, pp.162-163. ナーポリの工業化に伴う学制改革の必要性に関する大教育論争が展開された。工業の再生のために学校は職業人、技術者、専門家、会計係、会社経営者を養成して協力しなければならなかった。古典的制度に関する1884年の報告書で、統一イタリアの大教育者の一人であるアリストイーディ・ガッベッリ (Aristide Gabelli) は、多くの進路を提案し、「生徒に彼らが人生において携わる研究と実践」を用意して、学校は「古典的」と「技術的」の伝統的な区分を増大させなければならぬ、と確言した。(Cit. in G. Gentile, *L'unità della scuola media e la libertà degli studi*, in 《*Rivista filosofica*》, marzo-aprile 1909, ora in *La nuova scuola media, Seconda edizione rivista e ampliata*, a cura di Hervé A. Cavallera, Firenze, 1988, p.1.さらに、その後、ナーポリ大学教授のミケーレ・ケルバーカー (Michele Kerbaker) は、自由で開かれた学校の輪郭を描いた。その中
  - では、「すべての生徒が、指導者との相談で、研究か多くの人が行くコースか、を選ぶことができる」。 *Osservazioni sul riordinamento della scuola secondaria*, in 《*Randicono*》 dell'Accademia di archeologia, lettere e belle arti, giugno-dicembre 1908, cit. in G. Gentile, *L'unità della scuola media e la libertà degli studi*, cit., p.11. 要するに、個人の職業や近代社会の要請といった点で考えられた「多様な」学校である。
  - 10) Gentile, G. *La riforma dell'educazione*, pp.164-165.
  - 11) *Ivi*, p.165.
  - 12) この観念は、1912年の『哲学としての教育学綱要』(Sommaro di pedagogia come scienza filosofica.)において体系化を行った。「哲学は常にその中に教育の問題を包摂している。」Gentile, G. *Sommaro di pedagogia come scienza filosofica*, 1912, ora in 5<sup>ed.</sup>, 1970, vol. I. p.113.
  - 13) *La riforma dell'educazione*, p.203. Cf. Di Lalla, M. *op.sit.*, p.546.
  - 14) *Ivi*, p.7.
  - 15) *Ivi*, p.8.
  - 16) *Ivi*.
  - 17) *Ivi*, p.9.
  - 18) *Ivi*, pp.9-12.
  - 19) *Ivi*, p.12. 「国民は自然に存在するものではなく、実在すなわち大きな精神的実在である。・・・また、それは存在し、確認されうる一事実ではなく、マッツィーニが言うように、一つの使命、一つの目的、存在し実現されるべき何物か、すなわち行動である。」 *ivi*. 「ジュゼッペ・マッツィーニにとって、人間の国民性は、先祖伝来の富ではなく勝ち取られた富である。」 *ivi*.
  - 20) *Ivi*, p.13.
  - 21) したがって、科学は、もはやその内容と無関係な精神の装飾あるいは備品ではない。それは、文化、すなわち精神の形成である。」 *ivi*, p.14. 「結論を言うと、その人格を知識から区別する者は、知識の本質を知らない。現代の教師は、一つの人格の行動でない知識を知らず、その理念、思惟し知覚する方法、その生命である世界から取上げられうる人格を知らない。」 *ivi*, pp.14-15.
  - 22) Gentile, G. *Il fascismo al governo della scuola*, 1924, p.211. ora in *La riforma della scuola in Italia*, 3<sup>ed.</sup> Firenze(Le Lettere), 1989, p.147.
  - 23) *Ivi*.
  - 24) Gentile, G. *Educazione e scuola laica*, 1921, ora in *Scritti pedagogici*. I. 4<sup>ed.</sup>, Milano-Roma 1932. p.98. pp.427.
  - 25) Gentile, G. *Il fascismo al governo della scuola*, 1924, p.217. ora in *La riforma della scuola in Italia*, p.153.
  - 26) *Ivi*, pp.153-154.
  - 27) Gentile, G. (a cura di Simona Giannatoni), *Lettere a*

- Benedetto Croce, Firenze, Vol. I, 1973. Vol. II, 1974. Vol. III, 1976. Vol. IV, 1980. Vol. V, 1990. (*Lettere a Croce*と略記) pp. 336-337. なお、クローチェの側から第一次大戦を巡る両者の理論を取り扱ったものに、倉科岳志「クローチェと第一次世界大戦」、『日伊文化研究』XLIX, 平成18年、がある。
- 28) Croce, B. (a cura di Alda Croce), *Lettere a Giovanni Gentile* (1986-1924), Milano, 1981. (*Lettere a Gentile*と略記) p.476.
- 29) *Lettere a Gentile*, p.478. 一般人と同様に戦争についての確かな情報をえるにいたっていない様子を述べている。
- 30) Croce, B.-Prezzolini, G. (A cura di Emma Giammattei.) *Carteggio* II, 1911-1945, Roma, 1990, n. 558. pp.433-434.
- 31) *Ivi*, n.560. pp.436-437.
- 32) G. Gentile, *Guerra e fede*, 1919, ora in 3<sup>a</sup>ed., 1989. (GF.と略記) pp.12-13.
- 33) Gentile, G. GF. pp.45-48.
- 34) Gentile, G. GF. pp.12-13.
- 35) Gentile, G. GF. pp.16-17.
- 36) Croce, B. *L'Italia dal 1914 al 1918. Pagine sulla Guerra*, 5<sup>a</sup>ed., Bari, 1965, (*Pagine sulla Guerra*.と略記) p.21.
- 37) Gentile, G. GF. pp.22-36.
- 38) *Lettere a Croce*, IV. p.779.
- 39) *Lettere a Gentile*, p.483.
- 40) Croce, B. *Pagine sulla guerra*, p.72.
- 41) Gentile, G. GF. p.83.
- 42) Dopo la vittoria. Nuovi frammenti politici, *Quaderni della «Voce»*, Roma, 1920, pp.46-47.
- 43) *Ivi*, p.172.
- 44) Gentile-Omodeo, *Carteggio*, Firenze, pp.166-167. p.171.
- 45) Gentile, G. GF. p.93.
- 46) *Lettere a Croce*, V. n.930. p.239-240. この雑誌に寄稿を求め、特に発刊号への原稿を依頼した。
- 47) *Lettere a Gentile*, n.855. pp.582-583.
- 48) *Lettere a Gentile*, n.858. p.584
- 49) *Lettere a Croce*, V. n.931. p.241.
- 50) *Lettere a Gentile*, n.872. p.596.
- 51) *Lettere a Gentile*, n.946. p.271.
- 52) Gentile, G. *Teoria generale dello spirito come atto puro*, 1916, ora in 7<sup>a</sup>ed. 1987. VIII. Nota.
- 53) *Lettere a Gentile*, n.887, p.603.
- 54) B. Croce, B. *Nuove pagine sparse*, vol. I, 2<sup>a</sup>ed., Bari, 1966, pp.63-64.
- 55) Gallo, M. *Vita di Mussolini*, Bari, 1967, p.151. クローチェとムッソリーニの関係については、Rizi, Fabio Fernando, *Benedetto Croce and Italian Fascism*, Toronto, 2003. を参照。
- 56) *Lettere a Gentile*, n.925, pp.621-622.
- 57) B. Croce, *Pagine sparse*, vol. II, 2<sup>a</sup>ed., Bari, 1960, (P.s.と略記) pp.476-477.
- 58) *Ivi*.
- 59) *Lettere a Gentile*, n.944, pp.635-636.
- 60) *Lettere a Croce*, V. 1023, pp.374-375.
- 61) *Lettere a Gentile*, n.947, pp.638-639
- 62) *Lettere a Gentile*, n.968, p.655.
- 63) *Lettere a Gentile*, n.1038. pp.404-407.
- 64) La riforma scolastica in pericolo, ora in Croce, B. *P. s.*, II. 2<sup>a</sup>ed., p.441-445. クローチェに高い尊敬の念を抱いているムッソリーニに宛てても手紙を書くことが求められたが、結局書かれなかった。
- 65) *Lettere a Gentile*, n.985. pp.668-9.

(2008年9月30日記)